

ふくしまときのこ

小沢 晴司（宮城県松島町在住）

川内村にて

「それで、川内のきのこはどの種類が食べられるのか、どのように調理したら安全とっていいのか」

同村婦人会長が質問しました。それは、私が福島の放射能汚染対策に派遣された2012年からほど遠くない年の秋、森やきのこについての放射線リスクコミュニケーションの勉強会でのことでした。

「きのこは、とにかく野生のものは食べないよう気を付けてください」

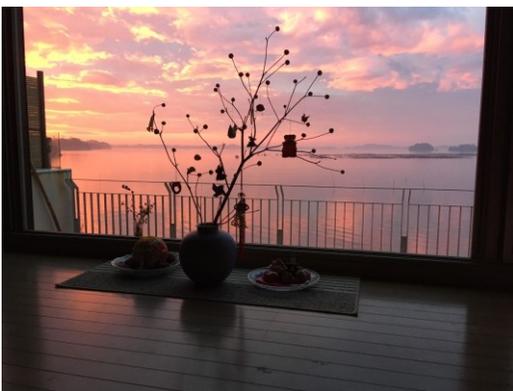
講師は、川内村のことをご存じですが、恐らく講演への派遣元から示されたマニュアルがあったのかもしれない、野生のきのこは食べないで、という以上の答えが出てくる可能性は会場では難しそうでした。

婦人会長はじめ川内村の皆様は、きのこの種類や同定も詳しく、今年はタマゴタケが豊作だったとか、いのはな（コウタケ）も、ク

ロカワもよくご存じです。村内には、国内でも珍しいセンボンキツネノサカヅキも自生していて、婦人会の皆様も商工会の皆様も、勉強してこのきのこを大切にしよう注意しています。

川内村は2011年の原子力災害により、一時自主的に全村避難し、一部の区域は避難指示が発令され、農地や農家の庭、家の屋根、道路や、集落等に近い林は除染をすることになりました。村の商工会長からも、また、当時いわきに住んでいた浅井郁夫さんからも、当方が当時福島全域での除染事業の責任者の一人でしたので、除染で道路沿いの地面を剥いだり、枯木の落枝や落葉を取り除いたりするとき、センボンキツネノサカヅキの自生地は注意して作業してください、と連絡を頂いたこともありました。

ある種のきのこがセシウムを集めやすいということはよく知られていて、村の婦人会



夜明けの松島湾（松島山荘で）



好きなイヌセンボンタケ（木彫：二橋愛次郎氏作）

の皆様もよく承知しています。その上で、勉強会では、どのきのこが比較的安全で、また線量を下げするためにどのような調理法があるのか、と、講師に聞いたのです。

川内村など阿武隈山系の山村は元々、飲み水は湧き水や地下水を使い、谷沿いや山肌に田畑を造作して、春は山菜、秋は木の実やきのこが食卓にのぼります。山菜取りもきのこ採りも余暇ではなく、日常生活の中にある営みです。

トナカイと南サーミ人

30年以上経ちますが、旧ソ連時代の1986年、チェルノブイリ原子力発電所が爆発し、北欧の森や湿原、コケ・地衣類の広がる大地にも放射能が降りました。

そこはサーミ人というトナカイとともに暮らす放牧の民の世界、そのうち特に南のサーミ人の地域にチェルノブイリからの使者が多く降下しました。大地の地衣類等はセシウムを集め、トナカイはそれを食べます。サーミ人は、肉も皮も、骨、内臓や血も、トナカイの全てを生活に活かして暮らしてきました。

そのトナカイが放射性セシウム1kgあたり数万ベクレル以上になるので、南サーミ人はトナカイと切り離されることとなります。それは彼らの日々の生活、文化のすべてを失うことと同様の意味をもちました。ノルウェー

政府は、彼らが日常的に食べているトナカイの基準を600ベクレルにおき、一方トナカイ肉の流通のためノルウェーの一般国民に、基準を一時的に6千ベクレルに上げるダブルスタンダードを採用しました。トナカイの肉の放射線量が減るよう、屠殺する前に、汚染されていない地衣類等を運んで食べさせる方法も取り入れられました¹⁾。当時、ノルウェーで制限緩和された基準がどのように見えるか…、日本の基準は厳しすぎるとの感想を持つノルウェーの方もいるといいます。本来の生活文化を維持しトナカイを食べた南サーミ人のガンの発症率は、そうでない地域の人と比べても低かったというデータもあるといいます²⁾。

飯館村

秋になると、元原子力規制委員会委員長の田中俊一先生からよくお声がけ頂きます。先生は委員長退任後、飯館村飯樋地区に拠点をもちそこで生活を始められました。町内会の会合に出たり、春は山菜、秋はきのこをとり、地元の皆様との交流を持たれています。

田中先生の案内で裏山を歩き大量のコウタケに遭遇したことがありました。炊き込みご飯にしたり、チチタケを汁物にしたり、ヤマドリタケの仲間をバターで炒めたり…。

これまで化学物質の添加物が入った食品を日常的に食べ、アルコールで肝臓に刺激を



ハナゴケ（地衣類、トナカイの主食の一つ）



コウタケ（飯館村で）

与え、時々毒きのこの類も試しながら、自身の体が回復する不可思議。人の細胞は、毎日一兆個ほどが傷つき壊れ、再生していくといわれています。ガラス細工のように壊れたら元に戻らないというのではなく、常に壊れ、入れ替わっていく動的な系です。

再び川内村で

避難先から戻った川内村の方々は、ふるさとに放射能が残っていることを知っています。当時、長崎大学から保健福祉医療の専門家の折田真紀子先生が川内村に派遣されていました。村の人は畑で作った野菜が土からセシウムを引っ張ってきて線量上がるのではないかと、水道にしている湧き水や地下水は大丈夫だろうか、色々な心配がありました。若く朗らかな折田先生はそのような村の人と一緒に川内に住み、川内の野菜を食べ、水を飲んで暮らしました。当時の福島県副知事は、それが地元の皆様の不安を解く一番のコミュニケーションだと喝破されました。

松島で

昨年夏、役所をやめて松島湾沿いの鄙の家を借りて住み始めた頃、川内村から婦人会や商工会、喜多方から大和川酒造等の皆様が来てくださいました。夜が更けるのも忘れ、夏の海辺でこの9年を振り返り、話がつきません。山の幸に恵まれ、森や山が、生活や人生

と一体の川内村。元婦人会長が翌朝帰宅されるときおっしゃった言葉を反芻します。

「川内の山もいいけどな、海もいいな」。

この10年に重なる時間を一緒にもてましたこと、寛ぎや悲しみともに、観音菩薩の大悲のもと、有難くただ感謝するばかりです。

また村の皆様と松島の海に来て下さいますよう。そして、拙稿をご覧下さいました皆様も、機会があれば是非松島へ、海辺の鄙の山荘をお訪ね下さい。

参考：

- 1) 地域住民と原発事故の長期的影響 (2016)：ノルウェー放射線防御庁ほか編著
- 2) サーミ人被ばく量と健康：坪倉正治 (2015)：坪倉先生の放射線教室：福島民友新聞 2015年10月4日

著者プロフィール

1996年千葉菌類談話会入会。2020年仙台きのこ同好会参加。他に北海道きのこの会、神奈川きのこの会、関西菌類談話会、京都御苑きのこの会等入会経験あり。2012年から2020年夏、環境省退職まで福島で放射能汚染対策に携わる。松島町磯崎字西ノ浜在住。宮城大学教授、福島大学客員教授、総合地球環境学研究所共同研究員、京都大学生態学研究センター協力研究員、東北大学環境科学研究科非常勤講師



川内からの来訪 2020年 松島山荘で